新　刊

□池ノ上利幸：花を訪れる蛾たち．知られざる姿を求めて．A4．215 pp．2008．￥6,000．昆虫文献六本脚．ISBN: 978-4-902649-08-6.

花粉媒介動物として，蝶や蜂や虻はよく知られているが，蛾はよほど特殊なケースでないと認識にのぼらない．共進化の研究観察対象として蛾が登場するけれど，蝶よりはるかに種類の多い蛾のほんの一部に過ぎない．だいたい蛾の活動は夜間が主体なのに，花は夜は眠っていて送粉行動はお休みだろうという先入観を持っていた．本書の２－80頁は，花の上で吸蜜したり休んだりする蛾の姿が，各頁８枚のカラー写真で記録されていて，その姿や模様の多様さにあらためて驚かされる．ほとんどの写真は，口吻が花に差し込まれている状態が捉えられており，吸蜜行動であることがわかる．

81－204頁には，620種類についての訪花行動などが簡潔に記されていると共に，その蛾の訪花が観察された植物名が，多くの場合複数示されており，著者の観察・記録の綿密さがうかがわれる．ビロードナミシャクは54種類もの花で観察されている．

私としては，蛾の名前よりはその訪花植物名の方に興味があるのだが，残念ながら本書には植物名索引はない．そこで植物名を抽出して，どんな植物が観察対象となったかを調べてみた．夜間撮影が多いので，もしかすると撮影し易い花に偏っていて，蛾と花の相互関係を掴むには不足していないだろうか，と思ったからだ．

全部で173種類の植物が記録されていた．観察された植物の種類数の多い科を挙げると，キク科（38種類），バラ科（15種類），マメ科（９種類），ツツジ科（８種類），スイカズラ科（６種類）という具合．一方，一種類の花で記録された蛾の種類数は，セイタカアワダチソウ（173種類），フジ（168種類），クリ（164種類），ウツギ（118種類），ヒヨドリバナ（126種類），リョウブ（116種類），イタドリ（92種類）等々である．なお写真には，「食事をしない蛾」という見出しでオオミズアオやカレハガなどが示されているが，これらは索引には出ていないので，著者が蛾と花の関係を意識して本書をまとめたことがわかる．ユウスゲは花粉授受のほとんどを蛾に依存している，との記事もある．

かねてからキブシのような，まだ早春の寒い時期に，地表ではなく風通しの良い空中で咲く花がよくも結実するものだと疑問に思っていた．ヤガの類が活動することは聞いていたが，本書では65種類もの蛾が記録されており，観察のねばり強さに驚嘆した．撮影し易い花に偏っているのでは？と疑ったのは軽率だった．アザミ属５種類については76種類の蛾が観察されているが，これは盗蜜に当たるのだろうか？　著者の1000回を超える観察の成果で，植物の繁殖行動を知る上で重要なヒントを内蔵している．昆虫文献六本脚の連絡先は〒102−0075 千代田区三番町24−3 三番町MY ビル（Tel. 03−6825−1164 Fax. 03−5213−1600）．

（金井弘夫）

□中庭正人：観察ガイドブック「茨城の海藻」B6 版（オールカラー）．128 pp．2008．￥1260．暁印書館．ISBN: 978-4-87015-165-9.

茨城県沿岸は寒流に洗われる日本の南端に位置し，海産生物にとっての大きな分布境界が存在する．海藻も例外でなく，ここが寒海域の海藻の分布の南限である種が多く生育する．

著者は高等学校教諭として勤務のかたわら，47年の長きにわたり茨城の海藻の研究を続け，その集大成として本書をまとめている．茨城県沿岸に生育する代表種141種が潮上帯，潮間帯上部，中部，下部，低潮線付近，潮下帯という生育帯の区分順に，１頁に２種ずつ，必要に応じて生態写真や顕微鏡写真も混じえて掲載されており，実地観察のガイドブックとして大変に使いやすくできている．巻末には30頁を投じて茨城県の海藻観察地をほぼすべて網羅しており，現場の調査には大いに役立つ．

海洋生物生態系の長期モニタリングの必要性がさけばれる中，著者のような地元に根ざした方々の長年の観察記録は重要な価値を持つ．さらに，著者は自費で「茨城の海を訪ねて47年（1961–2008）」を出版しており，これ